

「底が突き抜けた」時代の歩き方 547

「読んでもよくわからない小説」と「小説がイヤ」と書きつづける小説家

文芸評論家の田中和生が、《フランス現代思想の内田樹、コラムニストの小田嶋隆、IT企業社長の平川克美、映画評論家の町山智浩という異色のメンバーが書いた、四つの論考をおさめた『9条どうでしょう』》に引っ掛けて、「文学どうでしょう」（『文学界』06．6）というエッセーを書いている。憲法第9条の条文を抜き書きして、《現在この憲法第9条と文学が置かれている位置はとても似ている。いずれも現実にあわないからという理由で、存在する意義を疑われているからである》と文章の趣意を明確にしながら、こう続ける。

《現実的でないものは存在してはならない。実際に役に立つことが確認できる、「別のものに置き換える」かたちで使えないものは必要ない。それがいま第9条や文学といった言葉を取りまくイデオロギー的な気分である。だから「普通の国の憲法にはそんな条文はない」「北朝鮮が攻めてきたらどうするのか」「軍事力を伴う国際貢献ができないではないか」といった問いかけに答えられない第9条はなくていい。代わりに「普通の国の憲法」や「北朝鮮の相手をした国際貢献に使える軍事力」などの「別のものに置き換える」ことのできる言葉があればいい。文学についてもおなじである。「読んでもよくわからない」「儲からない文学は出版社のお荷物ではないか」「採算のあわない商品は存在するべきではない」といった問いかけに答えられない文学は存在しなくてもいい。》

しかしながら、「現実的でない」憲法第9条など必要ないと思っている人々がかなりいても、現実的に憲法第9条は曲がりなりに存続してきているし、同様に小説や詩等の文学作品は売れなくなると再三言われながらも、結構存続しているという点でも、《現在この憲法第9条と文学が置かれている位置はとても似ている。》憲法第9条問題が文学問題とどうしてもオーバーラップしてしまうほどに、彼は《現実的でないものは存在してはならない》という気分が昂まっていることに目を向けているのだ。

もともと《現実的でない》第9条を敗戦後60年にもわたって掲げてきながら、今さら《現実にあわない》という理由を持ちだして、第9条を現実的に改正しようとするのはあまりにも朝令暮改的であるし、そもそも日本政府も日本国民も、《現実的でない》憲法理念に日本を含む世界の現実を近づけるために、どのように努力してきたのか、という自戒の念も忘れてはならないだろう。けれども9条問題について考えるとき、どうもそんなことでもないのも確かである。おそらく日本政府も日本国民も、第9条については半分信じた振りをして、半分信じた振りをしてこなかった。それは、敗戦後の日本が60年間もほとんど戦争に巻き込まれなかったのは、半令第9条のおかげであるけれ

ども、あとの半分は米国の庇護下にあるおかげであることを、日本国民の誰もが知っていたからだ。つまり、米国の庇護下になれば第9条の理想などたちまち吹っ飛んでしまっただろうし、米国の庇護下にあっても第9条がなければ、米国の同盟国として日本の参戦が免れえないのは明白であった。

第9条問題は日本だけでなく、米国にとっても大きな問題であった。なぜなら、米国は日本と共に第9条をも庇護することになってしまい、同盟国として日本の参戦を期待する米国の日本に対する圧力の前に大きく立ち塞かっていたのが、第9条であったからだ。このエッセーは「9条どうでしょう」ではなく、9条問題と共に炙りだされている「文学どうでしょう」に眼目を据えているから、次のようにしてそこへ踏み入っていこうとする。

《つまり日本は敗戦後の60年近く、現実にあわないものを憲法として信賴してきたのであり、2000年代に入ってその現実にあわないものを許容できなくなったと言うべきである。言い換えれば日本人は、「今まで一度も実現」されたことのないものを信じてができなくなったのである。そしてそれは、同時に文学を信じてができなくなったということも意味する。なぜなら文学そのものの言葉は「今まで一度も実現」されたことがない。それは文学を一冊の書物で置き換えることができないことからわかる。どんなにすばらしい文学作品でも「文学まであと少し」であり、そのことが逆説的に「文学」の存在を証明する。そういう仕方では文学はこれまで存在してきた。しかし「今まで一度も実現」されたことのないものを許容できない日本人は、そのような文学を信じてできない。》

日本人（だけでなく、全世界的な傾向のような気がするが）《2000年代に入ってその現実にあわないものを許容できなくなった》ということは、あらゆることを現実と照らし合わせて判断するようになったということである。現実を基準として判断する観点に立つなら、「9条どうでしょう」と「文学どうでしょう」は重なりようがない。憲法はたえず現実を基準とする判断にさらされねばならないが、文学は現実を基準とする判断にさらされてはならないからだ。したがって、第9条は現実を基準とする判断に耐えられなくなったとき、破棄されるか改正されなくてはならないのははっきりしている。理想の中で日本人である我々は黙って朽ち果てるわけにはいかないからだ。第9条は非戦の理念を明記しているから守らなくてはならないのではなく、そう明記していることによって国際紛争に巻き込まれないで済む現実を手に行っているから、敢えて火中の栗を拾う度量も世界理念も持たない我々日本人にとっては、廃棄も改正もしないほうが都合よいのである。

しかしながら、文学は現実を基準とする判断に委ねられることがあってはならない。「虚構としての言語」でつくりあげられる文学と、「現実としての言語」でつくられる第9条とは、そこが決定的に異なってくる。第9条は一国の最高法規としてつねに現実に向き合わなくてはならないが、文学はつねに現実の外に置かれていなければ生きられ

ないのだ。「文学どうでしょう」の筆者は、『9条どうでしょう』の企画者である内田樹の説明を次のように引用する。

《獄舎の扉が外からしか開かないように、私たちを「臆断の檻」から解き放つ言葉は、檻の外からしか到来しない。

知的な人々は私たちが閉じこめられている檻の構造やサイズや鉄骨の材質や強度について、さらには檻の歴史や来歴についても詳細な知識を提供してくれる。けれども、そのような知識をいくら積み重ねても、それだけでは檻の扉は開かない。檻の扉は檻の外からしか開かないからだ。

(……)

必要なのは「鉄格子の隙間を抜けることのできるもの」である。

たぐみな「言葉使い」は、彼の本体を閉じこめている檻の鉄格子の外に言葉だけを出すことができる。そして、外に出た言葉だけが扉を外から開けることができるのである。》

この説明を素直に受けとめた筆者はそこで立ち止まって考えることなく、「文学どうでしょう」へとスライドさせて、《このような「鉄格子の隙間を抜けることのできる」言葉が、現在の文学にも必要とされるものであることは間違いない》として、《「檻」の外に出ている言葉》を最近の小説作品の中に探し求めようとするが、書かれている文章や言葉に対して従順で、根底から疑ってみようとししない態度こそが「文学どうでしょう」に最もふさわしくないということは忠言しておかなくてはならない。言葉は「檻」の外にどうやって出ることができるのか？《たぐみな「言葉使い」》によって出られるとすれば、それはどのように《たぐみ》であり、《「言葉使い」》であるのか？ そもそも《外に出た言葉だけ》で《扉を外から開けることができる》ものなのか？ といった数々の疑問を噴出させることなく、内田樹は説明しているだけだからだ。

《檻の扉は檻の外からしか開かない》ことは間違いない。知識人が《私たちが閉じこめられている檻の構造やサイズや鉄骨の材質や強度》等について、いくら知識を提供してくれても《それだけでは扉は開かない》こともまた、間違いない。だが、人々が扉の外へ出ようとするためには、自分たちが「檻」の中に閉じこめられていることをまず知らなくてはならないし、「檻」の外に自分たちの知らない世界があることを想像するようにならなくてはならない。知識人は「檻」の扉を開けることはしないけれども、人々が「檻」の中に閉じこめられていることを知らせる役割だけは果たしてきた。そんな知識人に対して内田樹は「檻」の外へ出るために、《必要なのは「鉄格子の隙間を抜けることのできるもの」》ではないか、と批判する。しかし、そう判断する彼自身、「檻」の《外に出た言葉だけが扉を外から開けることができる》と知識人の延長線上で言うだけで、依然として《檻の扉は開かない》ことには変わりはない。

「檻」の外に出ることができるのは《たぐみな「言葉使い」》である、と《たぐみな「言葉使い」》をすることで、内田樹の思考の胡散臭さがあらわれている。どんな《たぐみな「言葉使い」》かは全く判然としないが、手品師じゃあるまいし、芸当の問題では

ないだろう。「檻」の外に出るのは言葉だけではない。まず幻想的に自分が「檻」の外に出なくてはならない。「檻」の外に出る言葉は、「檻」の外に出る幻想的な自分によって語られなくてはならないからだ。そしてここが肝心な点であるが、幻想は幻想のまま放置されることなく、現実を生みださなくてはならない。つまり、「檻」もまた幻想である以上、「檻」の外に出た言葉をかかえこんで「檻」の中に「檻」の外をつくりだすのは現実の人間である。「檻」を外から開けるのは《外に出た言葉》ではなく、その言葉と共に外に出た現実的な人間であることは間違いない。どうして、《外に出た言葉だけが扉を外から開けることができる》というのだろうか。《外に出た言葉》であろうとも、言葉にそんな力はない。言葉にできるのは、言葉を掴む人間を見つけて彼を突き動かすことだけであり、そんな言葉を持った現実の人間が「檻」を外から開けることができるのだ。

田中和生はしかし、内田樹の説明に倣って、《「鉄格子の隙間を抜けることのできる」言葉》を探し求めて、小説を訪ね歩く。小説にとっての「檻」はどのようにあらわれているか。

《毎月生み出される小説をある分量ずつ読みつづけていると、小説にとっての「獄舎」が明晰で論理的な文章であることがわかる。この場合の明晰さは言葉の意味が正確に伝わるということであり、論理性というのは物語をきちんと導いていくことである。いずれも小説が「小説」として成立するための要素であるが、結果として「小説」として成立しようとする作品の文章はどれも似かよってきて、主題や物語内容や作者の性別などによって作品を入れ換えられるような気がしてくる。つまりそのような文章だけで書かれている「小説」は、主題や物語や作者の名前という「別のものに置き換える」ことができる。それは「檻」の内の作品であり、多くの「小説」がそうである。》

小説としての「檻」が、《小説が「小説」として成立するための要素》からけっして踏み外すことなく、読者に対して《言葉の意味が正確に伝わ》り、《物語をきちんと導いていく》という小説にとっての方程式そのものにあると考えられるなら、「小説」という「檻」を突き破る小説はまず、小説にとっての方程式に囚われないかたちを伴ってやってこなければならない。それは、《物語をきちんと導いていく》ことを放棄して、物語の破綻を意識的に招いたり、あるいは、《およそ「小説」の語り口としてはまったく別々の系統に属する明晰さと論理性をそなえた文章が、意図的に混乱され》るようにしてやってくる。《わたしたちが「小説」の外に出るためには「小説」の言葉を通す以外にな》く、「小説」の外に出るための《この破れかぶれに見えかねない語り口にどんな価値があるのかはまだわからない。しかし作者がそれを、これまでの「小説」が見たこともない価値のあるものと交換しようとしていることだけはわかる》と書く。

そして、《少なくとも「獄舎」の扉の鍵を開けようとする音は聞こえる》と続ける。もちろんその音が聞こえてこないとすれば、なんのための《破れかぶれ》なのかということだ。ここで注目する必要があるのは、「小説」がいま必死に見出そうとしているの

が「価値」であって、「意味」でないことである。「読んでもよくわからない」という、物語が読者に伝わることの「意味」を犠牲にしても、「小説」として存続していくための「価値」が優先されているのだ。この「小説」の傾向を押し進めていくと、読者に伝わるべき「意味がない」小説になっていくのではないか。

高橋源一郎は『ニッポンの小説 第16回』（『文学界』06・4）で遂にそんな「新しい小説」が現れたことを取り上げている。「ふざけてるのか？天才か？」とオビに書かれているNさん（たぶん中原昌也だろう）の、《小説には、短篇が15、中篇が1つ、入っている。二つの雑誌に、毎月（一度も休むことなく）交互に書かれた15の短篇は、後ろに行くほど（雑誌の掲載順に、この本の中に置かれている）、短くなる。たぶん、書くのが、だんだん苦痛になっていったからだろう。》

それぞれのあらすじを書こうとするが、途中でやめる。書く自分もイヤだけど、読まされる方もイヤだろうし、《Nさんだって、イヤではあるまいか》と、こう続ける。

《あらすじが書けないのは、この小説には、あらすじがないからだ。あらすじがない、のは、そもそも、「すじ」がないからだ。

とはいっても、「すじ」がない小説、お話がない小説、物語がない小説、というものはある。そして、そういう小説だって、なにかしら、元の小説より短い形で説明することはできる。なのに、Nさんの小説は、短くすると、説明不可能になる。》

それは短くしても残るものがないからだ。一言でいうと「意味」がないのである。《「意味がない」ものは、圧縮しても、「意味がない」。変形しても、「意味がない」。》Nさんの小説には「意味がない」のだ。そのことがわかったが、《だが、実際には、Nさんの小説には、「意味」がある。一つだけだが。そしてその一つは、他の小説よりずっと強烈な「意味」なのだ》と言う。それはどんな「意味」か、を明らかにするために、いくつかの短篇からところどころ切り取ってきて、指摘する。

《どれも同じことを書いてある。それは、仕事は辛い、ということだ。やりたくないけれど、報酬のためにやっている、ということだ。虚しいことをわかった上で、砂を噛むような気持ちで、そのことをやっている、ということだ。

いま、ぼくは「仕事」と書いた。しかし、他の短篇では、この、辛いこと、やりたくないこと、報酬のために仕方なくやっていること、その仕事の中身を、実は、完全に特定しているのである。》

その「仕事」とは「小説を書くこと」である。他の短篇にはこのような個所がみられる。「ぜんぜん望んではいない仕事だった。仕方なくやっている仕事だった。彼女にとって文筆とは売春と同じだった。恥を売る、ということにはどちらも変わりはない。それはまったく同じだ。書くことは何の救いにもならなかった。もし書く苦しみが少しでも読者の共感を得たとしても、それは何の喜びも彼女に与えはしなかった。ただただ無駄で退屈なことだった」

「サラリーマンは何もないところから、さも現実であるかのようなどうだっていい物語

を、言葉で紡いだりするか？ いや、人に物を売りつけるというのは実際には、創作だの表現だのといった仕事ととても似たようなものなのかもしれない。これは価値があるものですよ、とか何とか言って、本当は何の意味もない物を売りつけているのだ。売るものが、いかにその真価が疑わしいものであったとしても、それは口に出してはならない。さも、自分の書いていることは大変切実なことであるかのように振るまわなければならない。とても疲れる仕事だ。大変虚しい仕事だ。僕がこの仕事に手を染める前に思い描いていたものとは、まったく違っていた。小説を書いて金を得るというのは、添加物が入った食品を売って儲けるのと同じであってはならない。しかし、こうして実際に関わってみると、そういう身体に悪い食品を売っている業者とあまり大差がないのに気がついた」

Nさんが読者に伝えようとしている唯一の「意味」は煎じ詰めれば、「小説を書くのがイヤだ」ということである。読者にはっきりと伝わってくるのはそのことだけであり、それ以外の部分にあるのは、《実際に存在しない奇妙な会話であ》ったり、《無意味な事柄が思い浮かぶことであ》ったり、《なにからなにまで「ありえない」事態が発生したりすることだ》と、高橋源一郎は説明する。

《だから、Nさんの小説は、実は、きわめて、厳密に書かれている。

つまり、意味あることは、「小説がイヤ」ということだけで、そればかりが、アホみたいに単純なヴァリエーションで、繰り返される。そして、その一方で、「小説がイヤ」以外のすべての部分は、考えうる限りあらゆるタイプの、「意味のない」ことで埋め尽くされているのだ。

だとするなら、読者である、ぼくたちは、「小説がイヤ」という、Nさんの小説に書かれている、唯一の「意味」あることを、そのままメッセージとして受け取ればいいのか。どうか。「小説がイヤ」ということを「小説」の形で書くしかないNさんの「現代的な」苦衷を、感じればいいのか。》

その《Nさんの「現代的な」苦衷》とは一体、どういうものなのか。「小説がイヤ」なら、小説を書くのをやめればよい。誰でもそう思う筈だ。だがNさんは、《「小説がイヤ」ということを「小説」の形で書》こうとする。そうすることにかろうじて、いやもしかすると、大きな唯一の「意味」を見出しているようにすら見受けられる。芝居や映画の最後で、あなたがた観客が涙を流したり、感動に打ち震えてきたこのストーリーは全くの作り物でした、真っ赤な大嘘でした、と暴露するようなものだろうか。いや、Nさんはそんな悪趣味にはみえない。いま読んでいる読者にむかって、「ぜんぜん望んではない仕事」であり、「仕方なくやっている仕事」で、「書くことは何の救いにもなら」ず、「小説を書いて金を得る」ことは、「身体に悪い食品を売っている業者とあまり大差がない」のですよ、と「小説」のかたちを取って書きつづけるのだから、いやはや正直この上ないともいえる。

「小説がイヤ」なら書かなければよい、ということでは済まされないものが、Nさんの

「小説がイヤ」には感じら取れる。Nさんが「小説がイヤ」と言ったところで、Nさん以外の多くの作家が「小説がイヤ」でないところで多くの作品を産出して、読者に「救い」や感動やしみじみとした味わいを振り撒いているからだ。おそらくNさんは自分の書く「小説がイヤ」であるだけでなく、自分以外の者が書くすべての「小説がイヤ」だと思っているので、作家として自分の書く小説はどうしても「小説がイヤ」ということを書かないわけにはいかなくなっている。そこにはもっと深い意図が潜んでいるのかもしれない。「小説がスキ」とか「小説がイヤでない」ところでこれまで小説は書きつづけられてきたが、「小説」はもっと「小説がイヤ」ということまで含まなくてはならないのではないか。「小説がイヤ」というところで書かれる「小説」が、もっと現れなくてはならないのではないのか。

「小説がイヤ」な読者は当然のことながら、小説は読まない。「小説がイヤ」な読者は、「小説がイヤ」なところまで踏み入ろうとして、小説を読んだりもしない。しかし、作家はそうであってはならない。小説は「小説がスキ」な作家や読者だけで成り立つような「村」であってはならない。「小説がイヤ」ということを真正面から突きつけられているような小説があってもよいし、いや、現れてこなくてはならないのではないのか。「小説がイヤ」ということを書かれつづけることに、「小説」は耐えられるかどうか、どこまで耐えられるか。Nさんの短篇集は読んでいない（これからもたぶん読まないだろう）が、引用されている短篇の端端を目にするかぎり、Nさんの本当の意図とは無関係に、そんな気がしてくる。「小説がスキ」なら言葉も順調に進むだろうが、「小説がイヤ」ななかでは言葉も進まない苦衷に直面しながら、《「小説がイヤ」ということを「小説」の形で書く》Nさんの苦闘には、「小説がイヤ」と言いつづけられる小説もはたして、「小説」であることができるか、という問いが潜んでいるように思われる。

《「小説がイヤ」ということを「小説」の形で書く》ことは、もちろん、「小説がイヤ」という記述や描写で全篇を覆い尽くすことになる。「小説がイヤ」ということを明晰に説明する場面もあれば、無意味な会話や、つながらない情景描写のかたちをとって、「小説がイヤ」がどの個所からも聞こえてくるのだろう。当然、「すじ」も「お話」も「物語」も端から放りだされている。なにしろ「小説がイヤ」なのだから、いかに「小説がイヤ」であるかという記述で厳密に埋め尽くされている。「小説がイヤ」だから、書くのもいやになってくるだろう。書くのがますます苦痛になってくるなかで、どうすれば書きつづけることができるのか、ということがNさんの目の前にいつも大きく被さっており、そのことが「小説がイヤ」の意味として迫り出してくるのも感じられる。こうみえてくると、Nさんの「意味がない」ようにみえる「小説がイヤ」ということを書いた「小説」からは、「小説がスキ」からはみえてこなかったさまざまな「意味」が引きだされてくるのが「わかる」。

高橋源一郎は《Nさんの小説の「小説はイヤ」の意味》について、こう考える。

《——そう、ぼくが書くと「小説はイヤ」には、「小説はイヤ」という意味しかないと

いう答が返ってくるかもしれない。だが、この小説の「小説はイヤ」は、ただの「小説はイヤ」ではないことは明らかだ。それは、要するに、「労働としての小説がイヤ」ということだ。もっと露骨にいうと「意味のない労働としての小説がイヤ」、「苦役としての小説がイヤ」ということだ。そういう換えた瞬間、それは、誰にでも了解できる真理となる。

ぼくたちも、また、常に「意味のない労働」、「苦役としての労働」に従うことを運命づけられていて、しかも、そのことをできるだけ忘れようとしているからだ。

思えば、近代とは、「意味のない労働」の膨大な集積によって成立したのではなかったろうか。そして、その苦役からの解放を唱える革命の理論は、現実には敗れ去ったが、労働の本質は、いまでも変わらないのである。

小説を書く、ということの中に、とりわけ、資本主義社会下で、生計を立てるために小説を書く、ということの中に、苦役としての労働が発見される。あるいは、労働の本質をかいま見たのだ。

Nさんが、小説を書くという行いを通じて発見したのは、そのことだ、とぼくには思える。

ほとんどの作家が、気づかずにすましていること、あるいは、気づいているのに、見ずに通りすぎようとしていることを、Nさんは見つめる。そのことだけが、書くべきことではないのか。なぜなら、それを読む読者たちも、その「意味のない労働」や「苦役としての労働」にうちひしがれているからだ。》

確かに、「恥を売る」という点で「文筆とは売春と同じだ」とか、「小説を書いて金を得るというのは、添加物が入った食品を売って儲けるのと同じであってはならない」のに、実際は「そういう身体に悪い食品を売っている業者とあまり大差がないのに気づいた」という一節を目にすると、「意味のない労働」どころか、「よくない労働」、いや、その言いかたでも不十分で、「やってはならない労働」のように受けとめられる。「意味のない労働」を乗り越えて、「有害な労働」とすら形容されるべきだろう。したがって、「苦役としての労働」とは「意味のない労働」に従事していることの「苦役」ではなく、「有害な労働」であることに気づきながらも従事していることの「苦役」なのだ。Nさんは明らかに「意味のない労働としての小説がイヤ」と言っているのではなく、「有害な労働としての小説がイヤ」と言っているのである。

Nさんはパン（小説）を売りながら、このパン（小説）のなかには身体に悪い添加物が入っていますよ、と客に言いふらしているような振る舞いをしているのだ。他の作家にとっては困ったことに、Nさんは自分が売っているパン（小説）についてそう言いふらしながら、暗に他の作家が売っているパン（小説）にも添加物が入っていることを暴露していることになってしまっている。こうなると、Nさんはパン（小説）を売ることよりも、パン（小説）のなかには身体に悪い添加物が入っていることを客に告げることのほうがメインになってしまっていることに比重が置かれ、そして客がパン（小説）を買わないようにするためにパン（小説）を作りつづけているような気がしてくる。もち

ろん、N さんのパン（小説）は売れないだろうし、売れないことを覚悟の上でパン（小説）の有害さを訴えつづけているのだ。

「さも、自分の書いていることは大変切実であるかのように振るま」っではいるが、仕方なく「本当は何の意味もない物売りつけている」だけのことであり、その物には有害物質が入っていることまでほのめかすことによって、N さんは結局のところ、そんな小説など買うな、読むな、と読者にむかって繰り返しているのである。もしそのように受けとめるなら、N さんが自分の「有害な」小説のなかで言いつづけている小説の「有害さ」とは一体、なにか、という問いへと向かっていかなければならないが、N さんが《資本主義社会下で、生計を立てるために小説を書く、ということの中に、苦役としての労働》を発見したとみる高橋源一郎は当然、小説の「有害さ」には向かっていかない。N さんの「小説はイヤ」を「意味のない労働」はイヤ、として捉えた彼は、次のようなところへ引っ張っていく。

《労働者の解放を唱えて、工場や農村に乗り込んだ、初期の社会主義革命の運動家たちもまた、そのことに直面したのだ。労働者や農民たちは、彼らの説得に耳を貸さなかった。事実を知りたくなかった。事実が過酷すぎるために、夢を見ていたかったのだ。そして、その事態は、世界が飛躍的に豊かになったとされる現在も変わらないのである。》

しかしながら、この読み方では「意味のない労働としての小説がイヤ」ということに焦点を当てているだけで、N さんの「小説はイヤ」に迫りえているようには感じられない。N さんの「小説はイヤ」は、「意味のない労働としての小説がイヤ」に還元されることのできない問題を含んでいるからだ。彼もそのことには気づいている。だから、《N さんの小説には、なお、なにかが、そのようなわかりやすい説明では、捉えることのできないなにかが、存在しているように、「ニッポンの小説」というものを考える時、直面せざるをえない重大ななにかが、隠されているように、ぼくには思えるのだ》と書く。

吉本隆明の「詩学叙説」で言語の〈意味〉と〈価値〉について説明されている個所を引用しながら彼が見据えているのは、《「ニッポンの詩」と「ニッポンの小説が、同じ時、同じ場所で生まれた》という事実である。

吉本隆明の指摘に倣えば、「ニッポンの詩」は言語の〈価値〉に重点が置かれ、「ニッポンの小説」は〈意味〉に重点が置かれている。この指摘で立ち止まらされるのは、《わたしたちの意識の奥底には、どんなふうに言葉で述べても言いつくせないものが必ず残っている。また意識がどんなに言葉で表現しようとしても、その意図に従わない無意識の慾求もありうる。この言い尽せないものを言い尽そうと願う精神があるかぎり、言葉を〈意味〉でなくて〈価値〉で表現しようとする詩の本質にまつわる慾求が存在しうるというほかない》という個所だ。詩であれ散文であれ、言語というものは必ず《言い尽せないものを言い尽そう》とすることに向かう。それに対して散文は、《言い尽せないものを言い尽そう》としながらも、伝達に重点を置かねばならなくなっているために、深入りはできなくなっている。

《「ニッポンの詩」が、いまや、果てしなく「難解」になったのは》、たとえ〈意味〉からますます離れても、《言い尽せないものを言い尽そう》としない限り、なにも表現したことにはならないと思われているからだ。もちろん、「ニッポンの詩」がどれほど《言い尽せないものを言い尽》せるようになってきているのかどうかは知らないが、「わからない」という点で「意味」から離陸していることは確かである。もっと疑問を呈すれば、《言い尽せないものを言い尽そうと願う精神》が、《言語を〈意味〉でなくて〈価値〉で表現しようとする詩の本質にまつわる慾求》に寄り添っているとしても、詩が「難解」になっていくことが、《言い尽せないものを言い尽そう》としているからだとは必ずしもいえないということだ。「ニッポンの詩」は言語の〈価値〉に向かって「難解」を競っているとして、では《「ニッポンの小説」はどうなのか？》

《「ニッポンの詩」は、百年の時を経て、〈価値〉に、いや〈価値〉のみが存在する世界にたどり着いた。だが、「ニッポンの小説」はいまも、〈意味〉をもっとも重視する。

〈意味〉が、散文の本質なら、「ニッポンの小説」は、ずっと以前から、その本質にたどり着いていたのだ。そして、そこからずっと動こうとはしなかったのである。

では、「ニッポンの小説」を書きながら、つまり、散文を書きながら、なおかつ、「意識の奥底に」「どんなふうに言葉で述べても言いつくせないもの」が残っていると感じる者は、あるいは、そんな衝動に目を瞑り、〈意味〉ある小説を書きながら、なおかつ、「その意図には従わない無意識の慾求」を感じる者は、どうすればいいのか。》

高橋源一郎がここで提出しているのは、〈意味〉を断ち切ることのできない小説は、《言い尽せないものを言い尽そう》とする言語の〈価値〉に対してどのように振る舞えばよいのか、という問いである。彼によれば、《Nさんの小説が、深層でぶつかっているのは、「ニッポンの詩」を書く者たちがぶつかった設問と同じものだ》。つまり、小説の形式を選択しながら、《言い尽せないものを言い尽そうと願う精神》に向かおうとする欲求である。この欲求に従って Nさんは「小説はイヤ」であり、「意味がない」ところに突き進んだ。《だが、小説は、完全に〈無意味〉になることはできない。いや、完全な〈無意味〉には、耐えられない。だから、無意味に包囲されながら、「ない」表現で包囲されながら、ただ一つ、「小説」が〈意味〉として突出する。》

Nさんは「意味がない」小説を提出することによって、《詩は、危機の果てに、詩自身にたどり着いた。だが、小説は、危機の果てに、小説以外のものにたどり着くべきなのだろうか》という問いを突き出してみせ、小説の根底を揺るがしているのである。その《小説以外のもの》が《小説ではない、と断言することは、誰にもできない》と、高橋源一郎は締め括る。彼はそのように辿ってきたが、Nさんの「小説はイヤ」は、「小説は有害」の意味で受けとめようとする私とは当然異なってくる。Nさんが「小説は有害だ」と小説で書いているとすれば、小説のどういうところが有害であるのか。

小説は「何もないところから、さも現実であるかのようなどうだっている物語を、言葉で紡い」で、「本当は何の意味もない物」であるにもかかわらず、「これは価値がある

ものですよ、とか何とか言って」、売りつけることで成り立っている。単に「何の意味もない物」なら「無害」だが、物語が読者に取り憑いて「さも現実であるかのよう」に惑わせる点で、「有害だ」と言っているように聞こえる。「身体に悪い食品を売っている業者とあまり大差がない」という言いかたからは、小説は読者を現実の中で真剣に生きるように仕向けるよりも、現実と交差しない虚構の世界に読者を向かわせて、その世界に閉じこめる作用を強くもっているというふうに取り取れる。もちろん、N さんが「小説は有害だ」と小説で書いているとして、その「有害」の理由については本当のところよくわからない。少なくとも「意味がない」N さんの小説は、こんな現実はどこにもないし、物語なんて元からないことを露わにしていることによって、読者が N さんの小説の世界に浸ることは拒絶されており、「有害」であることから免れている。

ところで、《言い尽せないものを言い尽そうと願う精神》とは、吉本隆明が説明するように、《言語を〈意味〉でなくて〈価値〉で表現しようとする詩の本質にまつわる欲求》に支えられているものなのか。逆にいえば、その精神は言語の〈意味〉へと近づいていくことはないか。《言い尽せないものを言い尽そうと願う精神》が言語の〈価値〉に向かっているという説明が、どうも腑に落ちない。なぜなら、〈言い尽せないものを言い尽そうと願う〉のは、いうまでもなく《言い尽せないもの》に言葉を与えたいという欲求に基づいており、その欲求は《言い尽せない》自分を理解したいと願うところからやってくると思われるからだ。一言でいえば、わからない自分をわかりたいとたえず願っているからではないのか。合理的な自分が非合理的な自分を理解したいと思わなければ、《言い尽せないものを言い尽そうと願う精神》が隆起することはないだろう。

もしそうであるなら、《言い尽せないものを言い尽そう》とすること自体が、言語の〈意味〉に属することになるのではないか。そこには《言い尽せないもの》からの伝達の熱が感じられるからだ。自分が知らない別の自分を探し当てようとする欲求がなければ、誰が《言い尽せないものを言い尽そうと願う》だろう。自分を知りたいと願う欲求は、言語の〈価値〉であるよりも言語の〈意味〉に属するとどうしても思われる。確かに《言い尽せないものを言い尽そう》とすることは、既成の〈意味〉を踏み外して伝達の困難さを増すだろう。しかしながら、〈価値〉は創出されなくてはならないように、〈意味〉もまた不断に創出されなくてはならない。新しい言語の〈意味〉を求めて、《言い尽せないものを言い尽そうと願う》衝動に駆られるのだと思われる。

言葉の〈意味〉と〈価値〉とは本来的に、不即不離だろう。高橋源一郎が言うように、「ニッポンの詩」は〈意味〉から離れて、本当に《〈価値〉のみが存在する世界にたどり着いた》ののだろうか。では、その〈価値〉はどのようにして共有できるのだろうか。共有できなければ、どうして〈価値〉だと認めることができるのだろうか。〈価値〉を共有することは、〈意味〉抜きではありえないことではないのか。

2006年7月27日記